

## 2017年8月2日（水）九州電力東京支社への申入れ報告

### ～世界の脱原発の動きに抗して、前のめりに原発再稼働を進める九州電力～

木村雅英（再稼働阻止全国ネットワーク事務局）

8月2日（水）17時に、4人で電気ビルディング7階の九電東京支社応接室に入り、業務推進グループの藤本さんと瀬戸さんと面会し、再稼働阻止全国ネットワークと反原発自治体議員・市民連盟から抗議・質問書を提出した。

再稼働阻止全国ネットワークからは、「川内を止めろ・玄海を動かすな」抗議・質問書を提出した。以前（今回は4月）までの質問に回答を得ていないことを告げ、事故が起これなくても、原発の稼働は、使用済み核燃料を増やし、大地と空と海を放射能汚染し、温排水で海を温め、被曝労働を強いること、すなわち核と命とは共存できないことを強調した。

さらに、4点（九州電力エリアの電力需給について、死の灰の増加について、温排水は川内川の年間平均流量と同じ？、火山灰濃度について）の追加質問を加え、8月中に文書の回答を頂くよう、無理ならこちらから電話する、と述べた。

続いて、反原発自治体議員・市民連盟から「原発周辺自治体住民の暮らしの安全・安心を守ることを要求します」を提出し、7月の福島シンポジウム&現地見学会から福島の厳しい現実を伝え、原発周辺自治体の暮らしの安全・安心を守るために、3点（周辺自治体の反対意見を聞く、川内原発を直ちに停止する、玄海原発を稼働させない）を申入れるとともに、世界の原発停止への動きをどうとらえているか質問した。

これらは、九電本店他全社に伝達される。

読み上げの後、申入れについてしばし意見交換。

- 世界の脱原発の動きについて、九電は、また変わる、韓国もいずれ戻る、と脱原発の動きを否定する。
- 電力需給について、九電エリアの電力需給で再生エネルギーの比率が増大したデータを認めるが、該当データはゴールデンウィーク時で電力会社としては最も出力制御の困難な例外的な時期だと説明。こちらからは、再エネをうまく制御して利用し、足りない分を化石燃料を使ったら、原発は不要ではと提案した。
- 火山灰濃度の問題とともに、川内審査において、大噴火が予知できたら原発と燃料を移動させるとの非現実的説明を規制委が火山学会が予知不可能と否定したことを述べた。  
九電は、カルデラ噴火で鹿児島に人が住めなくなる事態を説明して逃げようとする。こちらからは、どんなに大きな自然災害が起こっても地球上の他の命に迷惑をかけないことが大切、原発が稼働していると地球を破滅すると訴えた。
- 川内原発の耐震重要棟（正式の緊急時対策所）の建設については、建てる場所がゲート入口のすぐそばで設計が進んでいる（はず）と答える。こちらからは、イチエフ事故の教訓として免震重要棟の重要性を強調する。
- 川内原発が吐き出す温排水の量が九州第2の一級河川である川内川の流量と同程度であ

ることを認める。

- 玄海の再稼働は、年内は難しい、年度内の再稼働を目標としている。遅れの原因は審査が延びているからと答える。こちらから、工事計画認可で「黒枠・白抜き」を控えようとしていい数字が出ないで苦労しているのではないかと問うたが、九電は否定した。
- 玄海再稼働について伊万里市など周辺自治体が反対していることについて、行政が迷惑施設に反対することに困惑を示した。
- 福島でフレコンバッグの山のそばに帰還させられようとしている現実について訴え、事故がコミュニティをこわしたことも強調。
- トリチウム汚染水に関する田中委員長「腸が煮えくり返る」発言について、経緯を確認し、こんな規制委の審査に合格して稼働することの危険性を訴えた。

質問への回答は、九電本店のエネルギー広報が窓口であることを再確認した。

以上。